

西アジアと地中海周辺の国家形成

イラン文明は、オリエントを統一したアケメネス朝からササン朝に引き継がれた。また、ギリシアから都市国家の伝統を継いだローマは、地中海周辺に大帝國を築いた。

Q▶ 西アジアと地中海周辺に現れた諸国家は、どのような特徴をもっていたのだろうか。

イラン諸国家の興亡とイラン文明

Q▶ イラン文明は、世界の歴史にどのような影響を与えたのだろうか。

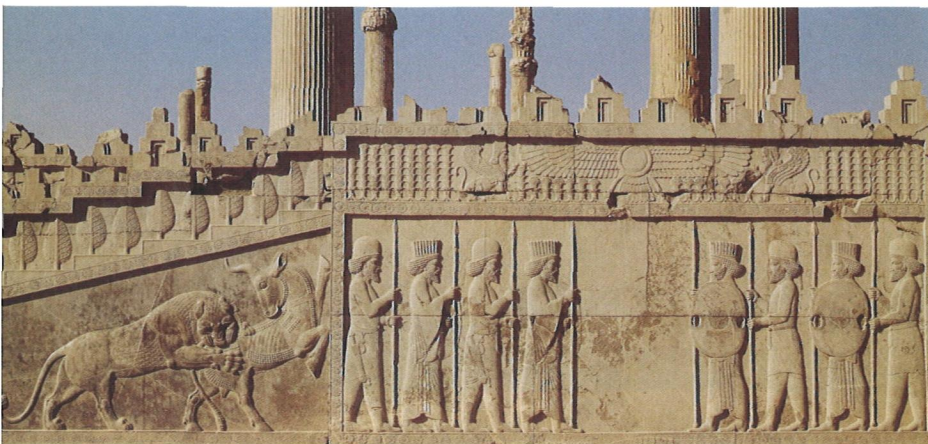
アケメネス朝の興亡

Q▶ アケメネス朝が広大な領域に中央集権的支配を築くことができたのは、なぜだろうか。

アッシリア王国崩壊後のオリエントでは、前6世紀半ば、イラン人
→p.27 Kyros II Achaemenes
 (ペルシア人)のキュロス2世がアケメネス朝をおこし、メディアとリディアを征服したのち、前539年にはバビロンを占領して、翌年ユダヤ人を捕囚から解放した。第3代のDarius Iダレイオス1世は、エーゲ海北岸からイ
→p.26
 ンドス川に至る大帝國を建設し、オリエントは再び統一された。彼は各
satrap
 州に知事(サトラップ)をおいて全国を統治し、「王の目」「王の耳」と呼ば
かんさつかん
 れる監察官を巡回させて中央集権化をはかった。また、金貨・銀貨を発
こうえき
 行し、海上ではフェニキア人の交易を保護して、財政の基礎を固めた。
→p.25
 陸上では全国の要地を結ぶ「王の道」と呼ばれる国道をつくり、都スサ
えきでんせい
 を中心に駅伝制を整備した。アケメネス朝は服属した異民族に寛大な政治
ふくぞく
 を行った。



アケメネス朝の領域



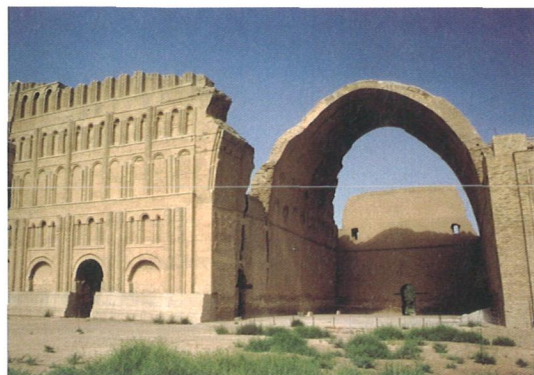
ベルセポリス「貢納^{こうのう}のレリーフ」 アケメネス朝の都の1つベルセポリスには、全土の諸民族から貢納のために使節が送られた。写真は貢納使節団を王が謁見^{えっけん}した宮殿の正殿(アパダナ)で、様々な衣裳を身につけた使節たちの様子が浮き彫りに描かれている。

をおこなったが、前5世紀前半にギリシア人と戦って敗れ(ペルシア戦争)、ついに前330年マケドニアのアレクサンドロス大王によって滅^{→p.69}ぼされた。
→p.71

アケメネス朝はオリエントの諸民族の文化を統合し、また、楔形文字を表音化してペルシア文字をつくった。イラン人の民族的宗教であるゾロアスター教(拜火教)は、この世を善(光明^{はいいか})の神アフラ=マズダと、悪(暗黒)の神アンラ=マンユ(アーリマン)との闘争と説き、最後には光明神の勝利によって人間に幸福がもたらされるとした①。

①ゾロアスター教はユダヤ教やキリスト教にも影響を与えたとされ、さらに南北朝・隋唐時代^{てい}の中国に伝わり、祇教と呼ばれた。またインド・イラン起源のミトラ神信仰は、ゾロアスター教にも取り入れられたが、のちにローマ世界に伝えられてミトラ教となった。

クテシフンの宮殿跡^{あと} クテシフンは、パルティアおよびササン朝の首都として栄え、ホスロー1世の宮殿跡(推定)には、「ホスローのアーチ」が残されている。



パルティアとササン朝

Q▶ パルティアとササン朝の繁栄には、どのような要因があったのだろうか。

前334年、ギリシアから東方遠征に出発したアレクサンドロス大王は、エジプトとアケメネス朝を征服後、さらにインド西北部にまで進出して、一時的に東西にまたがる大帝国をつくりあげた。大王が征服した西アジアの領土は、彼の死後、ギリシア系のセレウコス朝^{Seleukos}に受け継がれた。しかし、前3世紀半ばにアム川上流域のギリシア人が独立してバクトリア^{Bactria}を建てると、まもなく遊牧イラン人の族長アルサケスもカスピ海東南部^{ぞくちよう}を建てると、まもなく遊牧イラン人の族長アルサケスもカスピ海東南部

にパルティア^{Parthia}(中国名は安息)を建国した。パルティアは、前2世紀半ばにメソポタミアを併合してティグリス川東岸のクテシフンに都を定め、「絹の道」(「シルク=ロード」)による東西交易^{こうえき}で大いに栄えた。
→p.39

パルティアを倒して建国したのが、農耕イラン人のササン朝^{Sasan}である。建国の祖アルダシール1世^{Ardashir I}は同じくクテシフンに都をおき、ゾロアスター

教を国教とした。第2代皇帝**シャープール1世**

Shapur I
在位241頃～272頃

はシリアに侵入してローマ軍を破り、皇帝**ヴァレリアヌス**を捕虜とした。また、東方ではインダス川西岸に至る広大な地域を統合し、中央集

権的な体制を確立した。

ササン朝は5世紀後半、中央ユーラシアの遊

牧民**エフタル**の侵入を受けたが、**ホスロー1世**

Khosro I
在位531～579

の時代にトルコ系遊牧民の**突厥**と結んでエフ

タルを滅ぼし、また東ローマ帝国(ビザンツ帝国)との戦いも優勢に進め、

和平を結んだ。しかし、ホスロー1世の没後はしだいに衰え、7世紀半

ばにイスラーム教徒のアラブ人に征服されて滅んだ。

→p.86

イラン文明 の特徴

Q> パルティアとササン朝は、東西の文明のあいだでどのような役割を担ったのだろうか。

初期のパルティアの文化は、ヘレニズム文化の影響が強かった。しか

し1世紀頃、イランの伝統文化が復活はじめると、ギリシアとイランの神々がともに信仰されるようになり、公用語もペルシア語になった。

ササン朝の時代になると、ゾロアスター教の教典『**アヴェスター**』が編集された。また、3世紀の宗教家**マニ**は、ゾロアスター教や仏教・キリス

ト教を融合して新しく**マニ教**をおこした。マニ教は北アフリカや中央ユーラシアに広まり、唐代の中国にも伝えられた。

ササン朝時代には、建築・美術・工芸が大いに発達した。精巧な銀器・ガラス器・毛織物・彩釉陶器の技術や様式は、イスラーム時代へと受け継がれるとともに、西方ではビザンツ帝国を経て地中海世界に、東方では中国を経て日本にまで伝えら

れ、天平文化に影響を与えた。

ササン朝(左)と法隆寺(右)の「獅子狩」

図案 馬上の騎士が身をひるがえして獅子を射る絵柄は、アッシリアからササン朝まで広く好まれた図案で、中央ユーラシア・中国を経て日本にも伝わった。左はシャープール2世を描いた銀メッキ皿。右は法隆寺の「四騎獅子狩文錦」で、ササン朝の影響がみられる。

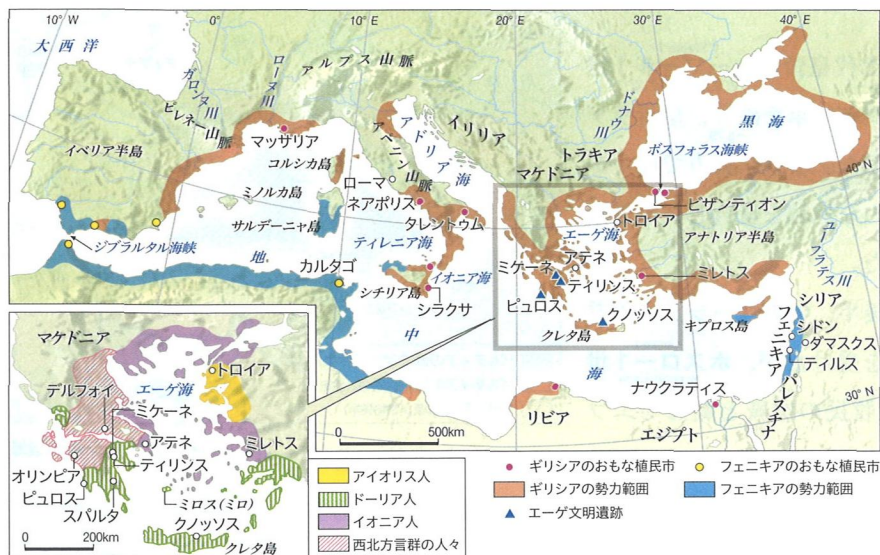


パルティアとササン朝の領域

② ササン朝の滅亡は651年であるが、642年のニハーヴァンドの戦いでアラブ=ムスリム軍に敗れ、王朝は事実上崩壊した。ササン朝の残存勢力は唐に救援を求め、唐の中央ユーラシア進出やイラン文化受容のきっかけとなった。

④ キリスト教の教父アウグスティヌス(→p.84)もカルタゴ在住時代の青年期にマニ教の影響を受けた。また、アルビジョワ派(→p.129)などキリスト教異端の一部にも、マニ教の影響が認められる。





ギリシア人の都市国家と勢力範囲 ギリシア人のポリスは地中海全域と黒海沿岸に分布し、古代都市の原型になった。ネアポリス(現在のナポリ)やマッサリア(現在のマルセイユ)、ビザンティオン(のちコンスタンティノブル、現在のイスタンブール)のように現代まで続くものもある。

ギリシア人の都市国家

2

Q オリエント文明と比べて、ギリシア人の社会にはどのような特徴があったのだろうか。また、それがのちのヨーロッパ近代文明に与えた影響は何だろうか。

ポリスの成立と発展

Q ポリスは、オリエントの都市国家とどのように異なっていたのだろうか。

地中海沿岸には、オリエントの影響を受けながらも独自の都市文明が栄えた。そこで大きな役割を果たしたのはインド = ヨーロッパ語系のギリシア人と古代イタリア人であったが、彼らの文明が周辺の非インド = ヨーロッパ語系の人々から影響を受けて発生したことも無視できない。

ミケーネ文明の崩壊後、ギリシアは暗黒時代(初期鉄器時代)と呼ばれる混乱した時代に入った。また、ギリシア本土の混乱を避けて、アナトリア半島西岸やエーゲ海の島々に移住するギリシア人もいた①。

前8世紀に入ると、各地で有力貴族の指導のもとにいくつかの集落が連合し、**アクロポリス**(城山)を中心^{acropolis}に人々が**集住**(^{しゅうじゅう}シノイクスモス)して都市国家を建てた。これらをポリス^{polis}という。ポリスの成立で社会は安定し、暗黒時代は終わった②。

前8世紀半ばからギリシア人は、人口の増加にともない地中海と黒海の沿岸各地に多くの**植民市**^{しゅうみんし}を建設したが、これは先進地域であったオリエントとの交易^{こうえき}を活発化させた。また、同じ頃フェニキア文字をもとに

①移動が終わる頃、ギリシア人はおもに方言の違いから、イオニア人・アイオリス人・ドーリア人にわかれていた。

②その一方で、内陸部などにはポリスがつくられない地域も残された。

つくられたアルファベットが、商業活動
→p.25
で用いられるとともに、ホメロスらの文
→p.72
学の成立をもうながした。

各ポリスは独立した国家だったので、
5 古代のギリシアはつねに小国分立状態に
おかれ、ついに統一国家をつくることは
なかった。しかし文化的には、ギリシア
人は共通の言語と神話、デルフォイのア
ポロン神の神託、4年に一度開かれるオリンピアの祭典などを通じて、
10 同一民族の意識をもち続けた。彼らは自分たちを^{Hellenes}ヘレネス、異民族を
^{barbaroi}バルバロイと呼んだ③。

市民と奴隷

Q ポリスにおいて、人々はどのような生活を営んでいたの
うか。

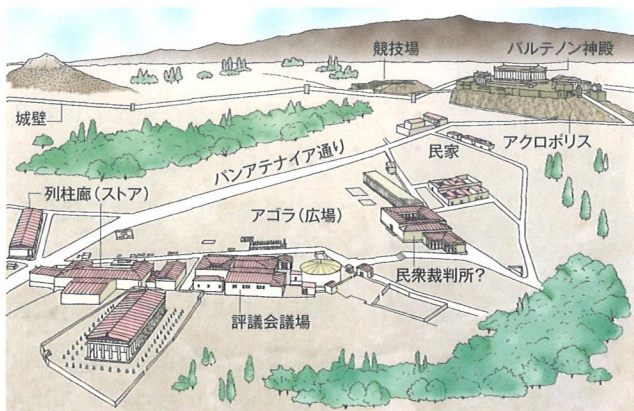
ポリスの住民は、自由人の^{れいぞく}市民とこれに隷属する^{どれい}奴隷からなり、^{けいとう}市民
15 には貴族と平民との区別があった。貴族は^{ふゆうしや}血統を誇る富裕者であり、高
価な武器と馬を所有する戦士として役割を果たした④。こうして前7世
紀までには、貴族が政治を独占する貴族政ポリスが一般的になった。し
かし平民は貴族に従属せず、市民同士の関係は平等が原則であった。他
方、奴隷は人格を認められず売買の対象となり、市民との身分差は大き
20 かった。奴隷とされたのは借財によって市民身分から転落した人や戦争
^{ほりよ}捕虜、海外から輸入された異民族などであった。

ポリスは、城壁で囲まれた^{じょうへき}市域と周囲の田園から成り立っていた。市
域の中心の^{とりで}アクロポリスは、^{しんせい}砦であると同時に神殿が建てられる神聖な
場であった。^{agora}アゴラ(広場)では市場や集会が開かれた。田園には市民の
25 所有地である「^{もふんち}持ち分地」(^{kleros}クレーロス)があり、彼らの大多数はここで農
業を営んだ。市民にとっては、ポリスこそが人間生活の基盤であった⑤。

アテネとスパルタ

Q スパルタがきびしい軍国主義をしいた理由は何だろ
うか。

ポリスのなかでも奴隷制度がもっとも発達したイオニア系のアテネで
30 は、個人所有の奴隷がふつうであった。その数は総人口の3分の1にも
のほり⑥、家内奴隷・農業奴隷として用いられたほか、手工業や銀山の



アテネの市街図(前4世紀)

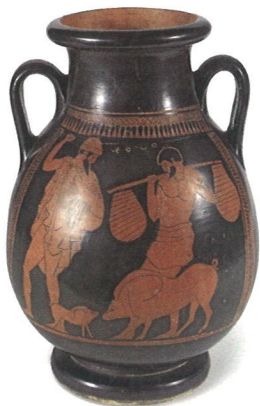
アクロポリスは、国家の祭祀
の場であるとともに公金を保
管する国庫の役割も果たした。
アゴラは市民の公共生活の中
心で、市場や役所・裁判所な
どに人々が集まった。

③ヘレネスとは「英雄ヘレン
の子孫」を、バルバロイとは
「わけのわからない言葉を話
すもの」を意味する。

④ポリスは本来、武器を自分
の費用で購入できる農民が戦
士としてかたちづくる共同体
(戦士共同体)であり、戦士と
して戦うことが市民に求めら
れる第一の義務であった。同
じ都市国家でも、神の権威を
背景とした王が専制支配をお
こなうオリेंटなどの都市
国家とはこの点で異なってい
た。

⑤のちにアリストテレス(→
p.73)は、「人間はポリ斯的動
物である」と定義した。

⑥アテネの総人口は最盛期で
約25万人であり、また、アテ
ネの奴隷は大多数が異民族で
あった。



主人(左)のお供をする奴隷(右)
ギリシアの奴隷は、家庭で働く家内奴隷がもっとも一般的であった。前5世紀の陶器絵。

さいくつ
採掘などにも多数従事させられた。

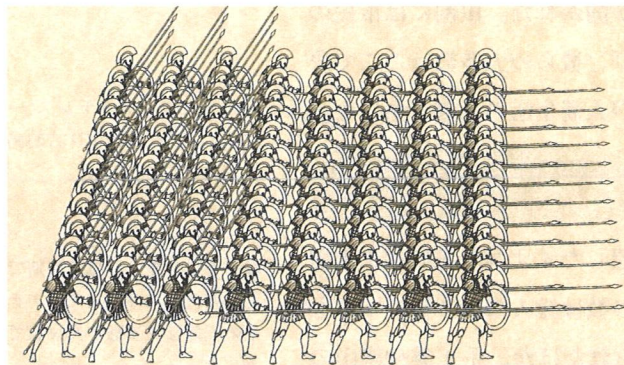
アテネと並び領土の広いスパルタでは、ドーリア系である1万人たらずのスパルタ市民が、はるかに多数の非ドーリア系の被征服民を奴隷身分の農民とし、農業に従事させた。彼らは^{heilotai}ヘイロータイ(ヘロット)と呼ばれ、商工業に従事する^{perioikoi}ペリオイコイ(周辺民)と同様、スパルタ市民に隷属していた。戦士であるスパルタ市民はヘイロータイの反乱を防ぐため、貴金属貨幣の使用を禁止したり、他国との自由な行き来を禁止する鎖国政策をとるなどして、市民団内部の結束を高めた。リュクルゴスの^{Lykurgos}国制と呼ばれる、このような特殊な体制を前6世紀半ばまでに確立したスパルタ市民団は、きびしい軍国主義的規律に従って生活し、ギリシア最強の陸軍国をつくりあげた。

民主政への歩み

Q ▶ なぜ貴族政にかわって民主政が発達していったのだろうか。

^{こうえき}交易活動が盛んになると、平民のなかにも、農産物を売って^{ふゆう}富裕になる者が現れた。また、金属の輸入で武器が安くなると、富裕な平民は武器を買って参戦できるようになった。これにより、平民も多数参加して密集隊形(ファランクス)^{phalanx}を組んで戦う^{しゅうさう}重装歩兵部隊が、騎馬を利用する貴族にかわって軍隊の主力となった。こうして国防において大きな役割を果たすようになった平民は、参政権を主張して貴族と対立しはじめ、各ポリスで民主政への歩みが始まった。

典型的な民主政が出現したのは、アテネであった。まず前7世紀に^{Drakon}ドラコンによって法律が^{せいぶん}成文化され、法による秩序の維持がはかられた。^{前7世紀}ついで前6世紀初めに^{Solon}ソロンが貴族と平民の^{ちやうていしや}調停者として改革をおこなった。^{前610頃～前560頃}



ギリシアの^{たて}重装歩兵 盾と槍で武装した重装歩兵部隊は、肩が触れあうほどに密集した隊形のまま激突した。上は壺絵に描かれた重装歩兵。

い、血統^{けっとう}ではなく財産額の大小によって市民の参政権を定め(財産政治)、また負債^{ふさい}を帳消しにし、以後、借財^{しゅくざい}を負った市民を奴隷^{どれい}として売ることを禁止^{さいむ}した(債務奴隷の禁止)。やがて多くのポリスでは、僭主^{せんしゅ}と呼ばれる独裁者が、平民の支持により非合法に政権を奪って僭主政治^{tyranny}を実現した。アテネではペイシストラトス^{Peisistratos}が前6世紀半ばに僭主政治を確立し、中小農民を保護するなど平民層の力を充実させた。

僭主政治の崩壊後、前508年にアテネの指導者となったクレイステネス^{Kleisthenes}は、血縁^{けつえん}にもとづく旧来の4部族制を、地縁共同体である区(デーモス)^{ちえん}を基礎として10部族制に改める大改革をおこない、アテネ民主政の基礎を築いた。僭主の出現を防止するため陶片追放^{とうへん}(オストラキスモス^{ostrakismos})の制度^①がつくられたのも、この時である。



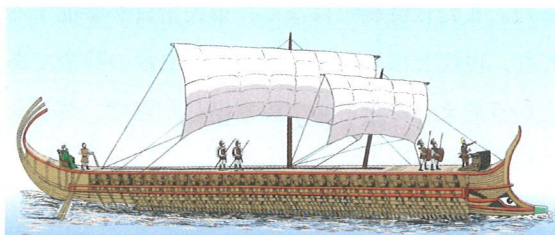
オストラコン どちらもテミストクレスの名が刻まれている。下は杯の丸い底部に「ネオクレスの子テミストクレスは去れ」と刻んである。

① 僭主になる恐れのある人物の名を市民たちが陶器の破片(オストラコン)に書いて投票し、全部で6000票以上集まったときに最多得票者を10年間国外に追放する制度。

ペルシア戦争とアテネ民主政

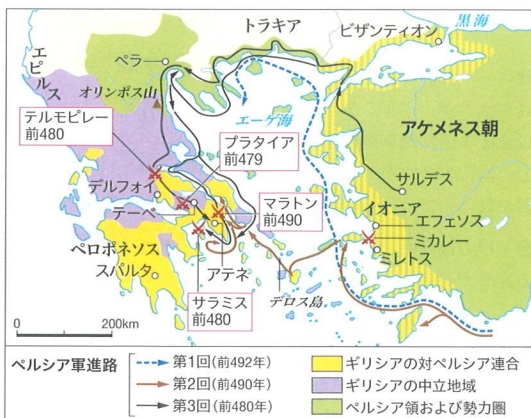
Q 古代の民主政は、現代の民主主義とどのような点で異なっていたのだろうか。

この頃、全オリエントを統一したアケメネス朝(ペルシア)の支配^{→p.63}に対し、ミレトスを中心としたギリシア人諸都市が反乱をおこした。これをきっかけに始まったのが、ペルシア戦争^{前500～前449}である。ペルシアは反乱を支援したアテネに遠征軍をさしむけたが、民主政によって団結を強めたアテネ市民の重装歩兵軍は、前490年のマラトンの戦いでペルシア軍を打ち破った。その後、アテネはテミストクレス^{Themistokles}の政策により海軍を拡充し、前480年のサラミスの海戦^{前524頃～前460頃}では、ギリシア連合軍が彼の指揮のもとでペルシアの大軍を再び大敗させた。翌年のプラタイアの戦いで、ギリシア側の勝利は決定的となった。



三段権船^{さんさんけん} 漕ぎ手が上中下3段にならんで腰かけ、いっせいにオールを動かす。高速のままへさき(右端)で敵船に体当たりし、沈没させる戦法であった。

ペルシア戦争 第1回は嵐で中止。ペルシア側に味方したギリシア人地域も少なくなかった。



ペリクレスの演説(前431年)

われらが従う政体は、他国の制度に追随するものではなく、他人をまねるよりむしろわれら自身が人の模範なのである。それは、少数者ではなく多数者の利益のために統治するがゆえに、民主政治という名で呼びならわされている。法律の面においては、私的な利害が対立する場合、だれでも平等の権利にあずかる。だが人の評価ということになると、各人が何かにすぐれているとみなされれば、みんなと平等の扱いではなく、国事のためどれだけ貢献できるかによって尊重される。さらにまた、たとえ貧しくとも、国家のために何かよい働きができるなら、無名だからといって高い地位への道をさまたげられることはないのだ。

(著者訳)



ペリクレス

Q この史料は、ペロポネソス戦争の戦死者を追悼するため、ペリクレスがおこなった葬送演説である。ペリクレスは民主政治の本質をどのようなものととらえているだろうか。



アテネの民会議場の演壇 階段の上の平らなスペースが演壇。市民であればここで誰でも発言でき、挙手による多数決で政策が決定された。

① エーゲ海沿岸を中心とした諸ポリスが、ペルシアの復讐に備えて結んだ軍事同盟。はじめ同盟の金庫がデロス島におかれたので、こう呼ばれた。

② 軍事の最高職。民会における選挙で選ばれた。

③ ペリクレスが提案した法の定めにより、参政権は両親がともにアテネ人である18歳以上の男性のみに与えられた。

ペルシア戦争勝利後、エーゲ海周辺の多くのポリスはペルシアの再侵攻に備えて^{Delos}デロス同盟^①を結び、アテネはその盟主となった。アテネは強大な海軍力でほかの同盟諸国に対する支配を強める一方、国内では軍艦の漕ぎ手として戦争に参加する無産市民の発言力が高まった。これを背景に前5世紀半ば頃、將軍^{Perikles}ペリクレスの指導のもとでアテネ民主政は

前495頃～前429

完成された。そこでは成年男性市民の全体集会である

^{みんかい}民会が多数決で国家の政策を決定し、將軍^②など一部を除き、一般市民から抽選された任期1年の役人が行政を担当した。裁判では、やはり抽選された多数の陪審員^{ばんいん}が、民衆裁判所において投票で判決をくだした。市民は貧富にかかわらず平等に参政権をもち^③、多くの一般市民が政治に参加した。他方、役人や政治家の

責任は弾劾裁判^④などできびしく追及された。

このような民主政は、デロス同盟諸国を中心としたポリスに広まった。市民団のなかでは政治的平等が徹底している一方で、^{どれい}奴隷・^{ざいりゅうじん}在留外人・女性には参政権がなかった。また代議制ではなく、市民全員が参加する直接民主政であったことも、現代とは異なるギリシア民主政の特徴である。しかし、民主主義という考え方をはじめて生み出した点で、ギリシア民主政の世界史的意義は大きい^⑤。

ポリス社会の変容

Q ギリシアの諸ポリスは、なぜマケドニアに敗れたのだろうか。

デロス同盟によって急速に勢力を広げたアテネに、^{Peloponnesos}ペロポネソス同盟^⑥の盟主スパルタは脅威を感じ、やがて対立する両者は前431年^{ペロポネソス戦争}に突入した。ギリシア人は、民主政を中心とするアテネ側と、

前431～前404



貴族政を中心とするスパルタ側の二陣営にわかれて戦うことになった。はじめ優勢であったアテネは、疫病の流行でペリクレスを失ってから政治が混乱し、有能な戦争指導者を見出せないまま、ついにペルシアと結んだスパルタに敗れた。その後、前4世紀半ばにはスパルタにかわりテーベが一時主導権を握るが、敗戦後も民主政を守り続けたアテネは勢力を回復し、さらにペルシアがギリシア人同士をたがいに争うようにしむけたので、これら有力ポリス間の争いはやまなかった。

戦争と疫病の影響で、ポリスでは市民の人口が減り、貧富の差が広がってポリス社会は変容しはじめた。その後、前4世紀後半、ポリスをつくらなかったギリシア人の一派である北方のマケドニアがフィリッポス2世のもとで軍事力を強め、前338年カイロネイアの戦いでテーベとアテネの連合軍を破った。フィリッポスはスパルタを除く全ギリシアのポリスをコリントス同盟(ヘラス同盟)に集め、それらを支配下においた。

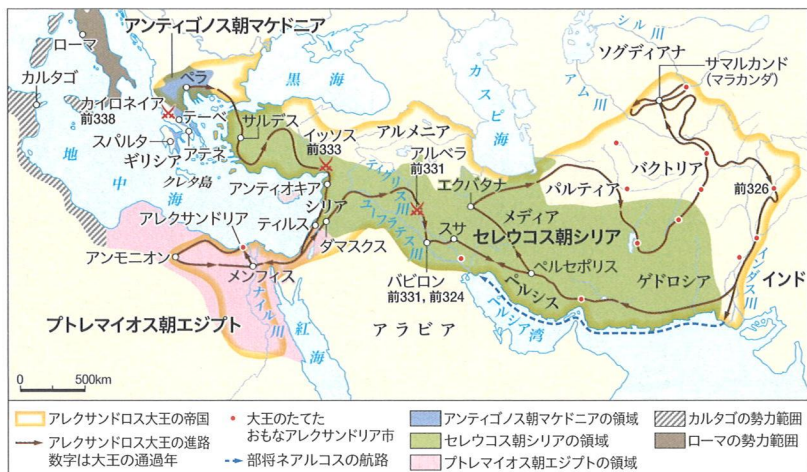
ヘレニズム時代

Q▶ ヘレニズム時代の世界史的な意義は何だろうか。

フィリッポス2世の子であるアレクサンドロス大王は、ギリシア諸国の争いにたびたび干渉してきたペルシアを討つため、マケドニアとギリシアの連合軍を率いて前334年、東方遠征に出発した。大王は、イッソスの戦いでペルシア王ダレイオス3世を破ったのち、エジプトを征服した。ついでアルベラの戦いに勝利してペルシアを滅ぼし、さらに軍を進めてインド西北部まで至り、東西にまたがる大帝国を築いた。大王はまもなく急死したが、その領土はディアドコイ(後継者)と呼ばれる部下の将軍たちによって争われ、やがてアンティゴノス朝マケドニア・セレウコス朝

イッソスの戦い アレクサンドロス大王(左、馬上の人物)が、敗走するダレイオス3世(右、戦車上の人物)を追う場面。この戦いの結果、ダレイオスの家族は捕虜となり、アレクサンドロスはシリア・エジプト征服への道を切りひらいた。前1世紀のポンペイの床モザイクより。

- ④ 一般市民が、役人や政治家による収賄などの重大犯罪を告発して裁判にかける制度。
- ⑤ 英語のデモクラシーは、「民衆の支配」を意味するギリシア語デモクラティアが語源である。
- ⑥ スパルタを盟主にして前6世紀末に結成された軍事同盟。デロス同盟に対抗した。



アレクサンドロスの帝国とヘレニズム時代の3王国

シリア・**プトレマイオス朝**エジプトなどの諸国に分裂した。大王の東方遠征から**プトレマイオス朝**エジプトの滅亡(前30年)までの約300年間を、**ヘレニズム時代**と呼ぶ。

この時代にはギリシア風の都市がオリエントやその周辺に多数建設され、これらの都市を中心にギリシア文化が広まった。なかでもエジプトのアレクサンドリアは、経済・文化の中心都市として大いに栄えた。このように、都市を基盤とする人々の生活は、その後もなお古代地中海世界に生き続けていった。

ギリシアの生活と文化

Q> ギリシア文明が近代ヨーロッパにもたらした影響は何だろうか。



船に乗ったディオニュソス神美しく絵付けされたギリシア産の陶器は、地中海沿岸各地に輸出された。ディオニュソスはオリンポス12神の一人で、ブドウと酒の神。前6世紀の陶器絵。

ギリシア人は明るく合理的で人間中心的な文化を生み出し、その独創的な文化遺産はのちにヨーロッパ近代文明の模範とされた。ギリシア文化は、市民が対等に議論するポリスの精神風土から生まれた。市民たちは、余暇を政治の議論や体育の訓練に使い、公私ともにバランスよく能力を発揮することを理想とした。

ギリシア人が信仰したオリンポス12神らの神々は、人間と同じ姿や感情をもつとされた。ギリシアの文学は、神々と人間との関わりをうたった**ホメロス**や**ヘシオドス**の叙事詩から始まった。しかし、その一方でギリシア人は、自然現象を神話でなく合理的根拠で説明する科学的態度を育て、前6世紀にはイオニア地方のミレトスを中心にイオニア自然哲学が発達した。万物の根源を水と考えた**タレス**や、「ピタゴラスの定理」を



ギリシアの劇場 ペロポネソス半島のエピダウロスにある前4世紀建造の大劇場跡。客席最上階にも舞台からの声が届くよう音響効果を計算した設計になっている。収容人数約1万4000人。

発見したピタゴラスら^{Pythagoras 前6世紀}が有名である。その後、前5世紀以降に文化の中心地となったのは、言論の自由を保障した民主政アテネである。民主政の祭典では悲劇や喜劇のコンテストがもよおされた。「三大悲

5 劇詩人」と呼ばれたアイスキュロス^{Aischylos 前525～前456}・ソフォクレス^{Sophokles 前496頃～前406}・エウリピデス^{Euripides 前485頃～前406頃}や、政治問題を題材にした喜劇作家のアリストファネス^{Aristophanes 前450頃～前385頃}が代表的な劇作家である。

弁論^{sophist}が市民生活にとって重要になると、相手をいかに説得するかを教えるソフィストと呼ばれ

10 る職業教師が現れた①。これに対してソクラテス^{Sokrates 前469頃～前399}は真理の絶対性を説き、知を愛する営み、すなわち哲学(フィロソフィア)を創始したが、民主政には批判的で、市民の誤解と反感を受けて処刑された。彼の哲学を受け継いだプラトン^{Platon 前429頃～前347}は、事象の背後にあるイデアこそ永遠不変の実在であるとしたほか、選ばれた少数の有徳者のみが政治を担当すべきだという理

15 想国家論を説いた。彼の弟子アリストテレス^{Aristoteles 前384～前322}は、経験と観察を重んじ、自然・人文・社会のあらゆる方面に思索をおよぼした。「万学の祖」と呼ばれる彼の学問体系は、のちイスラームの学問や中世ヨーロッパのスコラ学に大きな影響を与えた。また、ヘロドトス^{Herodotos 前484頃～前425頃}やトゥキディデス^{Thukydides 前460頃～前400頃}は、ともに歴史記述の祖と呼ばれ、過去のできごとを神話によってではなく、

20 史料の批判的な探究によって説明した。

建築・美術では、調和と均整の美しさが追求された。建築はおもに柱

ギリシア文化一覧表 (*はヘレニズム文化)

【文学】

- ホメロス…………『イリアス』『オデュッセイア』
- ヘシオドス…………『神統記』『労働と日々』
- サッフォー…………女性詩人。叙情詩
- アイスキュロス…………悲劇『アガ멤ノン』
- ソフォクレス…………悲劇『オイディプス王』
- エウリピデス…………悲劇『メデイア』
- アリストファネス…………喜劇『女の平和』『女の議会』

【哲学・自然科学】

- タレス…………イオニア学派の祖
- ピタゴラス…………「ピタゴラスの定理」を発見
- ヘラクレイトス…………「万物は流転する」と説く
- デモクリトス…………原子論
- ヒッポクラテス…………西洋医学の祖
- プロタゴラス…………ソフィスト。普遍的真理を否定
- ソクラテス…………西洋哲学の祖。知徳合一を説く
- プラトン…………イデア論を説く。『国家』
- アリストテレス…………万学の祖。『政治学』
- *エピクロス…………精神的快楽主義。エピクロス派の祖
- *ゼノン…………精神的禁欲主義。ストア派の祖
- *エラトステネス…………地球の円周を計測
- *アリストタルコス…………太陽中心説
- *エウクレイデス…………「ユークリッド幾何学」の創始者
- *アルキメデス…………「アルキメデスの原理」を発見

【彫刻美術】

- フェイディアス…………パルテノン神殿のアテナ女神像
- プラクシテレス…………ヘルメス神像
- *「ミロのヴィーナス」…………ヘレニズム彫刻。作者不詳
- *「ラオコーン」…………ヘレニズム彫刻

【歴史】

- ヘロドトス…………『歴史』。ペルシア戦争史
- トゥキディデス…………『歴史』。ペロポネソス戦争史

①「万物の尺度は人間」と主張したプロタゴラス(前480頃～前410頃)がその代表例である。

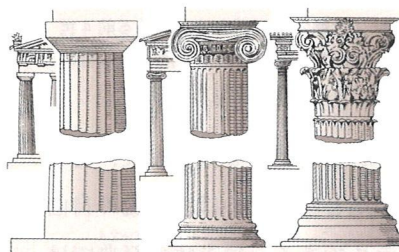


パルテノン神殿のフリーズ彫刻 パルテノン神殿柱上部の欄間(フリーズ)は祭礼行列を描いた彫刻で飾られ、また神殿内部にはフェイディアス作の黄金と象牙でできた巨大なアテナ女神像が安置されていた。

パルテノン神殿 アテネのアクロポリスの丘に立つ代表的なギリシア建築。前5世紀後半の建造で、アテネ民主政の最盛期を象徴する。かつては青・赤・黄色などで鮮やかに彩色がほどこされていた。



パルテノン神殿とその彫刻



ギリシア建築の柱の3様式 左から荘厳で力強いドーリア式、優美なイオニア式、華麗なコリント式の柱頭。



「ミロのヴィーナス」 エーゲ海のみロス(ミロ)島から出土した、美と愛の女神アフロディテ(英語でヴィーナス)像。女性の理想美を表現したヘレニズム彫刻の代表作品。高さ2.14m。

の様式により、ドーリア式・イオニア式・コリント式に分類される。ペリクレスの企画のもとに完成したアテネの**パルテノン神殿**は、ドーリア式神殿の傑作である。**フェイディアス**に代表される彫刻美術は、理想的な人間の肉体美を表現したものであった。

ヘレニズム時代に入るとギリシア文化は東方にも波及し、各地域の文化からも影響を受けて独自の文化が生まれた。これをヘレニズム文化という。この時代にはボリスの枠にとらわれない生き方を理想とする**世界市民主義**(cosmopolitanism)の思想が知識人のあいだに生まれた。哲学も政治からの逃避と個人の内面的幸福の追求を説くようになり、精神的快楽を求める**エピク羅斯派**(Epikuros)や、禁欲を重視する**ゼノンの**(Zenon) **ストア派**が盛んになった。

ヘレニズム時代の自然科学では、**エウクレイデス**(Eukleides)が今日「ユークリッド幾何学」と呼ばれる平面幾何学を集大成し、「アルキメデスの原理」で知られる**アルキメデス**(Archimedes)は、数学・物理学の諸原理を発見した。また**コイネー**(koine)と呼ばれるギリシア語が共通語となり、エジプトのアレクサンドリアには王立研究所(**ムセイオン**(Museion))がつくられて自然科学や人文科学が研究された。ギリシア美術の様式は西アジア一帯に広がり、インド・中国・日本にまで影響を与えた。

ローマと地中海支配

Q▶ ローマが全地中海世界を統一できたのはなぜだろうか。また、ローマ人がその後の世界に残した文化的遺産は何だろうか。

ローマ共和政

Q▶ ローマ共和政は、ギリシアの民主政とどのような点で異なっていたのだろうか。

前1000年頃、古代イタリア人が北方からイタリア半島に南下し、定住した。そのなかの^{Latins}ラテン人の一派によって、ティベル川のほとりに建設された都市国家がローマである。ローマは、はじめ先住民^{Etruscans}エトルリア人の王に支配され、その文化に大きな影響を受けていたが、前6世紀末に王を追放して共和政となった。ローマでは^{patrici}貴族(パトリキ)と、おもに中小農民である^{plebs}平民(プレブス)の身分差があり、最高官職である任期1年・2名の^{consul}コンスル(執政官)は貴族から選ばれていた。そして、貴族の会議である^{senatus}元老院が実質的な支配権を握っていた。

しかし、^{heavy infantry}重装歩兵として国防を担うようになった^{middle class}中小農民は、しだいに貴族の支配に対して不満をもち、平民と貴族との身分闘争がおこった。まず前5世紀前半に、元老院やコンスルの決定に拒否権を行使できる平民出身の^{tribune}護民官と、平民だけの^{citizenship}民会①である平民会が設けられた。ついで前5世紀半ばには、慣習法をはじめ^{customary law}て成文化した^{Twelve Tables}十二表法が制定、公開され②、前367年には^{Lex Licinia Sextiae}リキニウス・セクスティウス法によりコンスルのうち一人は平民から選ばれるようになった。そして前287年には^{Lex Hortensia}ホルテンシウス法により、平民会の決議が元老院の認可なしに全ローマ人の国法となることが定められ、ここに平民と貴族との法律上の権利は同等となった。

しかし、従来の貴族に一部の^{wealthy}富裕な平民が加わって新しい支配階層が成立すると、彼らが引き続き政権を独占した。また、実質的には元老院が指導権をもち続け、しかも非常時には^{dictator}独裁官(ディクタトル)が独裁権を行使できた。これらの点においてローマ共和政は、ギリシアの民主政と大きく異なっていた。

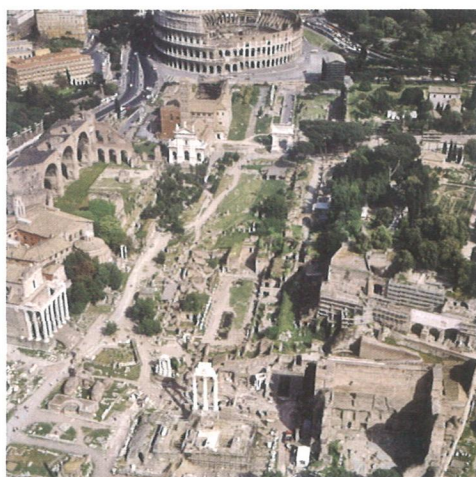
→p.70



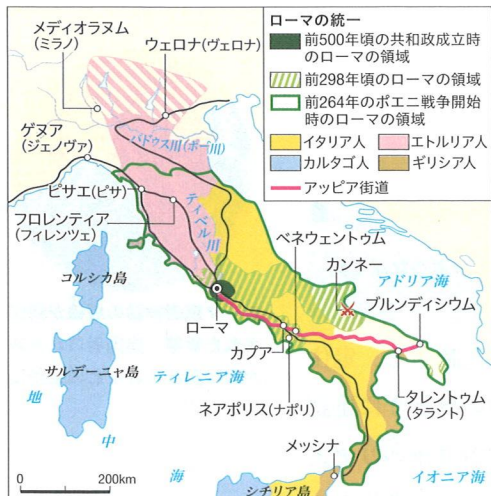
ローマ建国神話の雌狼が刻印された貨幣 建国者ロムルスが狼に養育されたとの伝説にもとづく。

①ローマには平民会とは別にいくつかの民会があったが、これらの決定にはいずれも元老院の承認を必要とした。

②それまで貴族が独占していた慣習法を成文化したことは、平民の地位向上に役立った。



フォロ＝ローマーノ 元老院など共和政ローマの中心がおかれていた広場の遺跡。市民の社交場や市場などとして、文化・経済の中心でもあった。



アッピア街道 ローマ人がつくったもっとも有名な道路で、「街道の女王」と呼ばれる。前312年建設開始。ローマとブルンディシウムを結ぶこの舗装道路は、東地中海遠征に向かう兵士や物資の迅速な輸送を可能にした。

ローマによるイタリア半島の統一

地中海征服とその影響

Q 地中海における領土拡大は、ローマ共和政にどのような影響を与えたのだろうか。



ローマの重装歩兵 中小農民からなる兵士たちは地中海征服の主役であったが、彼らの没落は都市国家ローマの社会を変質させた。

ローマは中小農民の重装歩兵を軍事力の中核にして、周辺の都市国家をつぎつぎに征服し、前3世紀前半には全イタリア半島を支配した。征服された諸都市は個別にローマと同盟を結ばされ、それぞれ異なる権利と義務を与えられた。この分割統治の方法は、被支配者の団結と反抗をたくみに予防した。またローマは、服属した住民の一部にローマ市民権をわけ与えて支配に従わせた。

ついでローマは、地中海西方を支配していたフェニキア人植民市のカルタゴと衝突し、3回にわたるポエニ戦争がおこった。カルタゴの将軍ハンニバルがイタリア半島に侵入してローマは一時危機におちいったが、スキピオの活躍などで戦局を挽回し、ついに勝利をおさめた。ローマはその後、東方のヘレニズム地域にも進出して、前2世紀半ばにマケドニアとギリシア諸ポリスを支配するようになり、地中海全体をほぼ制覇した。

しかし、ローマの中小農民は長期の征服戦争に出征するうちに農地が荒廃して没落し、彼らの多くは都市ローマに流入した。こうした無産市民たちは、属州から大量に輸入される安い穀物で生活するなどローマ支配の恩恵をこうむったため、いっそうの征服戦争を望んだ。一方、属州統治の任務を負った元老院議員や、属州の徴税請負をおこなう騎士階層は、征服によって莫大な富を手に入れた。彼らは、イタリア半島で

① イタリア半島以外のローマの征服地を指す。第1回ポエニ戦争の勝利によって獲得したシチリアが最初の属州となった。

② 最初、騎兵として軍務に服する階層を意味したが、共和政末期には軍事的意味を失い、元老院議員について富裕な社会階層を意味するようになった。

剣闘士 剣闘士とは、たがいに決闘したり^{もう}猛獣と戦ったりしてみせる奴隷。図はライオンや牛などと戦う剣闘士。民衆はこのような血なまぐさい見世物に娯楽を求めた。4世紀のモザイク画より。



農民が手放した土地を買い集めたり、征服でローマのものとなった公有^{こうゆう}地を手に入れるなどして、戦争捕虜である奴隷^{どれい}③を多数使った大土地所有制^{Latifundia}(ラティフンディア)によって大規模な農業経営をおこなった。こうして貧富双方^{ひんふそうほう}の市民に望まれた征服戦争はますます拡大し、それとともに市民のあいだの経済的格差もいよいよ広がった。その結果、前2世紀後半から、市民の平等を原則としたローマの都市国家としての性格は大きく変質しはじめ、共和政の土台はゆらぎだした。貧富の対立が激化すると、政治家は、元老院の伝統的支配を守ろうとする閥族派^{optimates}と、無産市民や騎士が支持する平民派^{populares}にわかれて争った。

③ローマではギリシアよりもいっそう奴隷制が発達し、共和政末期から帝政初期にかけてがその最盛期であった。

内乱の1世紀

▶ ローマの内乱はどのように生じ、また、どのように終息したのだろうか。

農民の没落による軍勢力低下に危機感をいだいたグラックス兄弟^{Gracchus}は、^{兄前162～前132、弟前153～前121}前2世紀後半にあいついで護民官^{ごみんかん}に選ばれると、大土地所有者の土地を没収^{ぼっしゅう}して無産市民に分配しようとした。しかし、改革は大地主の反対^{おおじぬし}にあって失敗し、兄は殺されて、弟は自殺した。以後有力政治家はたがいに暴力で争うようになり、ローマは「内乱の1世紀」に突入した。前1世紀に入ると、軍隊は有力者が無産市民を集めてつくる私兵^{しへい}となり、平民派のマリウス^{Marius}と閥族派のスラ^{Sulla}がたがいに私兵を率いて争った。また、イタリア半島の同盟市^{→同盟市戦争}がローマ市民権を求めて反乱をおこし、さらに^{みせ}見世物^{もの}に使われた剣闘士(剣奴)がスバルタクス^{Spartacus}に率いられて大反乱をおこす^{→p.82}など、内乱は頂点に達した。

この混乱をしずめたのが、実力者のポンペイウス・カエサル^{Pompeius Caesar}・クラッス^{Crassus}であった。彼らは前60年、私的な政治同盟を結んで元老院と閥族派に対



ローマの領土拡大

① ガリアは、ほぼ現在のフランスにあたる地域のローマ時代の呼称。



アウグストゥス帝の像 足もとの幼児は愛の神クビド(キュービッド)で、アウグストゥスが神々の子孫であることを示す。

抗し、政権を握った(第1回三頭政治)。その後、カエサルはガリア遠征の成功によって指導権を獲得し、対立したポンペイウスを倒して前46年に全土を平定した。彼は連続して独裁官に就任して社会の安定化につとめたが、元老院を無視して王になる勢いをみせたため、前44年、元老院共和派のブルートゥスらに暗殺された。

前43年、カエサルの部下アントニウスとレピドゥス、カエサルの養子オクタウィアヌスが再び政治同盟を結んで閥族派をおさえた(第2回三頭政治)。やがてオクタウィアヌスは、プトレマイオス朝の女王クレオパトラと結んだアントニウスを前31年にアクティウムの海戦で破り、プトレマイオス朝は滅ぼされてローマの属州となった。ここに地中海は平定され、内乱は終わりを告げた。

ローマ帝国

Q 「ローマの平和」は、地中海世界にどのような影響を与えたのだろうか。

権力の頂点へと登りつめたオクタウィアヌスは、前27年に元老院からアウグストゥス(尊厳者)の称号を与えられた。ここから帝政時代が始まった。彼は元老院など共和政の制度を尊重し、市民のなかの第一人者(principes)と自称した。しかし、実際にはほとんどすべての要職を兼任して、全政治権力を手中におさめていた。この政治を元首政(principatus)といい、事実上の皇帝独裁であった。

これより約200年間の時代は「ローマの平和」(パクス=ローマーナ)と呼

神皇アウグストゥス業績録(後14年)

6 度目、および7 度目のコンスル職の年に、余はすでに内乱を終結し、万人の合意に基づいて全権を掌握していたが、国家を余の権限から元老院およびローマ国民の裁定にゆだねた。このような余の功績に対して、余は元老院決議によってアウグストゥスの称号を授かり、我家の門柱は月桂樹によって飾られることが公認され、市民の冠が我家の戸口の上に付設され、また、黄金の肖像楯がユリウス議事堂に安置された。元老院

およびローマ国民がこれを余に与えたのは、余の勇氣、慈愛、正義、敬虔を称えるためであり、このことは、その肖像楯の碑銘によって明らかである。これ以後、余は権威において万人に優越していることがあっても、権力に関しては、余とともに公職にある同僚達より卓越したなにもものをも、保持することはない。

(古山正人他編訳『西洋古代史料集(第2版)』)

ばれ、空前の繁栄と平和が続いた。とくに**五賢帝**の時代はローマの最盛期で、**トラヤヌス帝**の時に領土は最大となった。ローマ風の都市が国境近辺にまで建設され、そのなかにはロンドン・パリ・ウィーンなど、のちに近代都市となったものも多い。

ローマは都市を通して属州を支配し、都市の上層市民はローマ市民権を与えられるかわりに帝国支配に貢献した。やがてローマ市民権の拡大は徹底し、ついに212年、**カラカラ帝**の時には帝国の全自由人にローマ市民権が与えられた。商業活動も盛んとなり、**季節風**(モンスーン)**貿易**によって中国・東南アジア・南アジアからは絹や香辛料がもたらされた。

Q この史料は、初代ローマ皇帝アウグストゥスが遺書のなかでみずからの功績を書き記した部分である。アウグストゥスは、元首(皇帝)としての自分の地位がどのようなものであるとらえているだろうか。また、それはなぜだろうか。

② ネルウァ(在位96~98)・トラヤヌス・ハドリアヌス(在位117~138)・アントニヌス=ピウス(在位138~161)・マルクス=アウレリウス=アントニヌスの5皇帝をいう。

帝国の変容

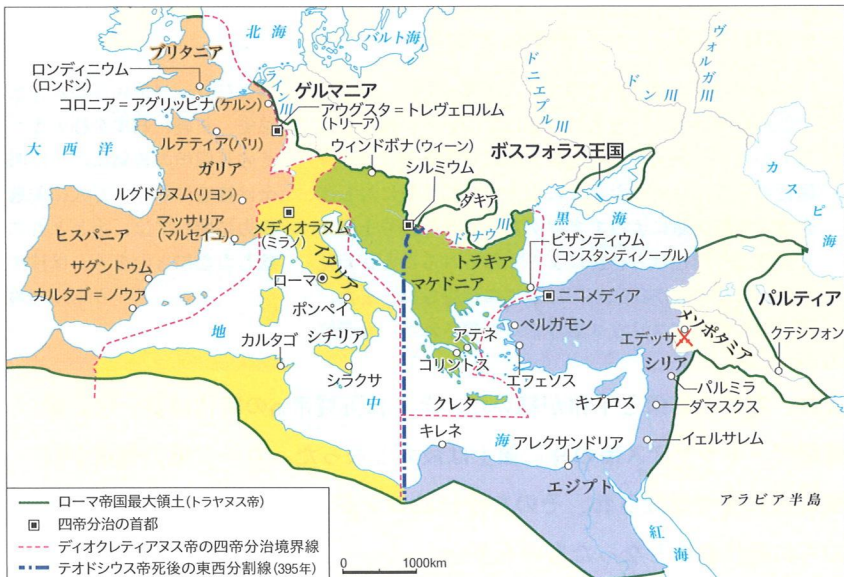
Q ローマ帝国が危機を迎えた原因は何だろうか。

ローマ帝国は、五賢帝最後のマルクス=アウレリウス=アントニヌス帝の治世末期頃から、帝国財政の行き詰まりや経済の不振がしだいにあらわになってきた。3世紀には各属州の軍団が独自に皇帝を立てて元老院と争い、短期間に多数の皇帝が即位する**軍人皇帝**の時代になった。また、北のゲルマン人や東の**ササン朝**なども国境に侵入し、帝国は分裂の危機におちいった。

内乱と異民族の侵入に対する軍事力が増強されると、軍隊の維持のため都市は重税を課されて経済的に弱まり、とくに西方の諸都市は衰退しはじめた。都市の上層市民のなかには、重税を逃れるため都市を去って田園に大所領を経営するものが現れた。彼らは、都市から逃げ出した下層市民などを小作人**(コロヌス)**として大所領で働かせた。こうした生産体制を小作制**(コロナトゥス)**と呼び、従来の奴隷制経営によるラティフンディアにとってかわった。



四帝分治制を記念する彫刻
東西の正帝・副帝4人が肩を
組み合っている。



ローマ帝国の領域とその分割

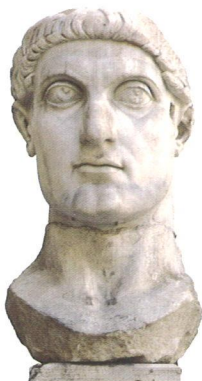
西ローマ帝国の滅亡

Q▶ 西ローマ帝国はなぜ滅んだのだろうか。

284年に即位した^{Diocletianus} **ディオクレティアヌス帝**は、帝国を東と西にわけ、それぞれを正帝と副帝の2人が統治する四帝分治制(テトラキア)をしいて政治的秩序を回復した。また軍の兵員を増やし、^{ちようぜい} 徴税の仕組みを新しくするなどの諸改革を断行して、分裂の危機を回避した。さらに皇帝を神として礼拝させ、専制君主として支配したので、政治体制はこれ以後、元首政から^{dominus} **専制君主政(ドミナトゥス)**へと変化した。

ディオクレティアヌス帝の政策を引き継いだ^{Constantinus} **コンスタンティヌス帝**は、それまで迫害されてきたキリスト教を公認することで帝国の統一をはかるとともに、軍隊をさらに増強して帝国支配を安定させようとした。また、コロヌスを土地に縛りつけて税収入を確保し、下層民の身分や職業を世襲化した。330年、彼はビザンティウムに新たな首都を建設して**コンスタンティノープル**と改称し、巨大な官僚体制を築いた。官吏の力は強大となり、皇帝が官吏を使って帝国を専制支配する体制ができあがった。

しかし、^{ほうだい} 膨大な数の軍隊と官僚を支えるための重税は、あいつぐ属州の反乱をまねいた。さらに375年に始まるゲルマン人の^{ぞくしやう} **大移動**によって国内部は混乱したため、帝国の分裂を防ぐことは困難になった。そこで



コンスタンティヌス帝の像
もとは高さ12mあった巨大な
座像の頭部。帝はこの巨像を
つくらせることによってみず
からの圧倒的な権威を示した。
4世紀前半。

395年、^{Teodosius}**テオドシウス帝**は帝国を東西に分割して2子にわけ与えた。東ローマ帝国(ビザンツ帝国)は首都コンスタンティノーブルを中心に商業と貨幣経済が繁栄し、その後1453年まで続いた。しかし、ローマを中心とする西ローマ帝国はゲルマン人の侵入で混乱をきわめ、ついに476年、ゲルマン人傭兵隊長^{ようへい}**オドアケル**によって西ローマ皇帝は退位させられ、ここに西ローマ帝国は滅亡した。^{めつぼう}
→p.93

ローマの生活と文化

Q ローマ人が残した文化的遺産には、どのようなものがあるだろうか。

ローマ人は、ギリシアから学んだ知識を帝国支配に応用する実用的文化において、すぐれた能力をみせた。ローマ帝国の文化的意義は、その支配を通して地中海世界のすみずみにギリシア・ローマの文化①を広めたことにある。たとえば、ローマ字は今日ヨーロッパの大多数の言語で用いられ、またローマ人の話したラテン語は、近代に至るまで教会や学術の国際的な公用語であった。

ローマの実用的文化が典型的に現れるのは、土木・建築技術である。都市には浴場・凱旋門・闘技場が建設され、道路や水道橋もつくられた。^{がいせんもん}**コロッセウム**(円形闘技場)・^{Pantheon}**パンテオン**(万神殿)・**アッピア街道**など今日に残る遺物も多い。「パンと見世物」を楽しみに生きていた都市下層民は、有力政治家が恩恵として配給する穀物をあてに生活し、闘技場での見世物に歓声をあげた。^{かんせい}

①ギリシア・ローマの文化遺産は、近世・近代のヨーロッパ人に古典として尊重された。そこでギリシア・ローマ時代は「古典古代」と呼ばれることもある。



コンスタンティヌス帝の凱旋門 凱旋門のなかでもっとも有名なもの。315年につくられた。高さ21m、幅26m。ローマ。



ローマ時代の水道橋(上) 前1世紀末に建設されたガール水道橋(南フランス)。全長270m、高さ50mの石造。ローマの土木技術の高い水準を示す好例。



コロッセウム(左) 古代ローマ最大の円形闘技場で、80年に完成した。剣闘士を戦わせるなどの見世物がおこなわれた。高さ48.5m、周囲527m。

ローマ文化一覧表

【文学】

ウェルギリウス……『アエネイス』（ローマ建国叙事詩）
 ホラティウス……『叙情詩集』
 オウィディウス……『転身譚』『恋の技法』

【歴史・地理】

ポリビオス……『歴史』
 リウィウス……『ローマ建国史』
 カエサル……『ガリア戦記』（ラテン散文の名文）
 タキトウス……『年代記』『ゲルマニア』
 プルタルコス……『対比列伝』（『英雄伝』）
 ストラボン……『地理誌』

【哲学・思想】

キケロ……弁論家。『国家論』
 セネカ……ストア派哲学者。『幸福論』
 エピクテトス……ストア派哲学者
 マルクス=アウレリウス=アントニヌス……ストア派哲学者。『自省録』

【自然科学】

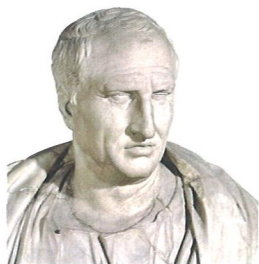
プリニウス……『博物誌』（自然科学の集大成）
 プトレマイオス……天動説を説く。『天文学大全』

【法学】

トリボニアヌス……『ローマ法大全』（編纂）

① ストア派哲学では、法律は宇宙の支配原理である自然の法則にもとづくべきであるとされた。

② 日本の明治政府（→p.256）が採用した民法はフランスやドイツを模範としたが、これら大陸ヨーロッパの法律はローマ法を受け継いでいる。



キケロ 共和政時代のローマを代表する弁論家・哲学者。近代欧米の政治演説に大きな影響を与えた。

後世にもっとも大きな影響を与えたローマの文化遺産は、ローマ法である。ローマが世界帝国に成長すると、万人が従う普遍的な法律が必要とされた。十二表法を起源とするローマ法は、はじめローマ市民だけに適用されていたが、やがてヘレニズム思想の影響を受けて①、帝国に住むすべての人民に適用される万民法に成長した。6世紀に東ローマ帝国のユスティニアヌス大帝がトリボニアヌスら法学者を集めて編纂させた『ローマ法大全』がその集大成である。ローマ法は近代へと受け継がれ、日本の民法にも深い影響をおよぼしている②。また、現在用いられているグレゴリウス暦（西暦）は、カエサルが制定したユリウス暦からつくられたものである。

精神文化では、ローマ人はギリシア人の独創性をこえられなかった。アウグストゥス時代はラテン文学の黄金期といわれるが、ウェルギリウスらの作品にはギリシア文学の影響が強い。散文ではカエサルの『ガリア戦記』が名文とされた。ギリシアに始まった弁論術はローマでも発達し、すぐれた弁論家キケロを生み出した。歴史記述の分野では、リウィウスやタキトウスらに有名であるが、政体循環史観で知られるポリビオス、ギリシア・ローマの英雄的人物の生涯を描いたプルタルコス、当時知られていた全世界の地誌を記述したストラボンのようなギリシア人による歴史書・地理誌も重要である。

哲学の分野では、とくにストア派哲学の影響が強く、その代表者であるセネカやエピクテトスが説いた道徳哲学は上流階層に広まった。皇帝マルクス=アウレリウス=アントニヌスはストア派哲学者としても有名である。自然科学では、プリニウスが百科全書的な知識の集大成である『博物誌』を書いた。また、プトレマイオスのとなえた天動説は、のちイスラーム圏を経て中世ヨーロッパに伝わり、長く西欧人の宇宙観を支配した。

① 帝国に住むすべての人民に適用される万民法に成長した。6世紀に東ローマ帝国のユスティニアヌス大帝がトリボニアヌスら法学者を集めて編纂させた『ローマ法大全』がその集大成である。ローマ法は近代へと受け継がれ、日本の民法にも深い影響をおよぼしている②。また、現在用いられているグレゴリウス暦（西暦）は、カエサルが制定したユリウス暦からつくられたものである。

4 キリスト教の成立と発展

Q▶ キリスト教が当時のローマ帝国に急速に広がった原因は何だろうか。また、ローマ帝国はキリスト教をどのように利用したのだろうか。

キリスト教の成立

Q▶ イエスが処刑された理由は何だろうか。

キリスト教は1世紀にローマ支配下のパレスチナで生まれた。当時ユダヤ教を指導していた祭司や、律法の実行を重んじたパリサイ派は、ローマ支配を受け入れ、貧困に苦しみ救済を求める民衆の声にこたえようとしなかった。

こうしたなか、イエスは祭司やパリサイ派を形式主義として批判し、貧富の区別なくおよぼされる神の絶対愛と隣人愛を説き、神の国の到来を約束した。民衆はイエスを救世主(メシア、ギリシア語でキリスト)と信じて彼の教えに従うようになった。祭司やパリサイ派はイエスをローマに対する反逆者として総督ピラトに訴えたため、彼は十字架にかけられて処刑された(30年頃)。しかし、その後弟子たちは、イエスが復活し、その死は人間の罪をあがなう行為であったと信じるに至った。この信仰を中心に、キリスト教が成立した。

その後まもなくペテロやパウロらの使徒によって、伝道活動が始まった。パウロは、神の愛は異邦人(ユダヤ人以外の民族)にもおよぶとして、ローマ帝国各地に布教し、キリスト教を広げた。信徒の団体である教会も、アナトリア・シリア・ギリシア、そして首都ローマにつくられた。その結果、3世紀頃までに、キリスト教はおもに奴隷・女性・下層市民など社会的弱者を中心に帝国全土に広がり、やがて上層市民にも信徒がみられるようになった。このあいだに『新約聖書』がギリシア語のコイネーで記され、『旧約聖書』とともにキリスト教の教典となった。

迫害から国教へ

Q▶ ローマ帝国は、キリスト教へどのように対応したのだろうか。

キリスト教が生まれた頃のローマでは、皇帝崇拜儀礼がしだいに強化されていたが、唯一絶対神を信じるキリスト教徒は皇帝礼拝を拒み、国家祭儀に参加しなかった。そのため彼らは反社会集団とみなされるよ



女性の病を癒やすキリスト
「福音書」の一場面を描いた壁画。
4世紀前半。

③メシアとは、ヘブライ語で「油を注がれた者」、つまり神から特別に祝福された者の意味で、キリストとはそのギリシア語訳である。

④イエスの教えを伝える「福音書」や、ペテロ・パウロによる布教の様子を記録した「使徒行伝」などからなる。



カタコンベ(カタコーム) ローマ市郊外に多いこのような地下墓地(**カタコンベ**)は、キリスト教徒が礼拝をおこなう場所としても用いられていた。墓室にはフレスコ画が描かれている。ヴィーア=ラティエナのカタコンベ。4世紀。

①父なる神、子なるキリストおよび聖霊は、3つでありながらしかも同一であるという説。

②ローマ・コンスタンティノープル・アンティオキア・イェルサレム・アレクサンドリアの5教会をいう。

うになり、^{Nero}ネロ帝の迫害(64年)から^{はくがい}ディオクレティアヌス帝の大迫害(303年)まで、民衆や国家から激しく迫害された。しかし、それにもかかわらずキリスト教は帝国全土に拡大を続けたので、帝国の統一を維持するためにコンスタンティヌス帝は313年の^{ちよくれい}ミラノ勅令でキリスト教を公認した。さらに324年、彼が全国を統一すると、キリスト教の公認は帝国全土に広がった。

325年にコンスタンティヌス帝が開催した^{こうかいぎ}ニケーア公会議においては、キリストを神と同一視する^{Athanasius}アタナシウス派が正統教義とされ、キリストを人間であるとする^{Arius}アリウス派は異端とされた。アタナシウスによるこの説は、のち^{さん み いったいせつ}三位一体説①として

確立され、正統教義の根本となった。また、『教会史』を著した^{Eusebius}エウゼビオスや、『神の国』でキリスト教の神の国が永遠であると主張した^{Augustinus}アウグスティヌスらの^{きよう ふ}教父と呼ばれるキリスト教思想家たちは、正統教義の確立につとめ、のちの^{しんがく}神学の発展に貢献した。

4世紀後半には、^{→p.134}「^{はいきょうしや}背教者」と呼ばれた^{Julianus}ユリアヌス帝が古来の^{た しんきよう}多神教の復興を企てたが成功せず、ついに392年、テオドシウス帝がアタナシウス派キリスト教を国教とし、ほかの宗教を^{げんきん}厳禁した。それとともに、一般信徒を^{しん と}指導・監督する^{しきよう}司教・^{しさい}司祭などの^{せいしよくしや}聖職者身分が成立し、教会の組織化が進んだ。ローマ帝国末期には^②五本山と呼ばれる教会がとくに重要となり、5つの管区にわけられた信徒たちを、それぞれが指導した。

一方、異端とされたアリウス派は北方のゲルマン人のなかに広まった。また431年の^{エフェソス公会議}で、キリストの神性と人性とを分離して考える^{Nestorius}ネストリウス派が異端と宣告されたが、のちにササン朝を経て^{けいきよう}唐代の中国に伝わり、^{→p.49}景教と呼ばれた。